

令和2年度学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立七尾高等学校

1 豊かな人間性と国際性の育成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> 学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。 異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。 各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時） 	【成果指標】 （生徒） 一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が	一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【7月実施学校評価アンケート】 （生徒） 80%以上 A	【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】 「一日一善」活動を啓発した結果、善行に対し高い意識（85%）を持っていることがわかった。啓発の方法としては教師からの指導、生徒会から「のぼり」を利用しての啓発活動、全部活動の部長への働きかけを行った。コロナ禍により人心が不安に苛まれがちになるが、七高から善行の機運を地域に発信し、新しい生活様式の中で希薄になりがちな人間関係を少しでも良好にしたい。 【今後の対応】 今後数年にわたり続けていき、七高生に浸透させたい。
	<ul style="list-style-type: none"> 「能登の里山里海」特別講座（1年） 令和2年度ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業（2年） 	【成果指標】 （生徒） 「ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている」と評価した生徒の割合が高まっている。	4月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	【12月実施学校評価アンケート】	【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 今後実施予定
	<ul style="list-style-type: none"> 異文化交流 	【成果指標】 （生徒） 「異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が湧いた」と評価した生徒の割合が高まっている。	4月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【12月実施学校評価アンケート】	【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。 今後実施予定
学校関係者評価委員の評価		一日一善運動の取組率の高さを評価する。ただし人を助ける際には自身に危険が伴うこともあるので、何でも善意で行えばいいというものではない。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		一日一善運動を継続するとともに、コロナ禍における生活や行動について引き続き指導していく。			

2 進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。</p> <p>・生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 志を貫くためのキャリア教育 キャリア教育講演会 全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 学習時間調査 ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 進路情報の発信 進路講演会 難関大学入試問題解法研究 金沢大学入試問題解法研究 習熟度別学習指導（週末課題） スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 金沢大学キャンパスビジット等 京大サマースクール 金沢大学による出張講座 保護者への進路説明会 学習計画の作成とチェック 志望校群別検討会（2年） 志望理由書の作成（1・2年） 批判的思考力育成（3年） 放課後の学習会 出願校検討会（3年） 	<p>【成果指標】 （生徒学年別） 第1志望に対して明確な理由がある。</p>	<p>高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して</p> <p>A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】</p> <p><生徒：1年生> 94名(98%) B <生徒：2年生> 142名(87%)B <生徒：3年生> 172名(92%)B</p>	<p>【判断基準】各学年目標 1年100（5割） 2年167（7割） 3年186（8割） Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】現2，3年生は昨年の前回よりも向上している。学科調べや志望理由書の作成や、外部の教材を活用して、指導したことが結果として出ている。</p> <p>【改善策】1，2年生は今後大学入試に関する説明会を実施し、そこでキャリアについて考える機会をもたせるとともに、昨年度効果があったと考えられる取り組みは継続していく。</p>
		<p>【成果指標】 （1年生生徒） 学習習慣を身につけ、成績を伸ばしている。</p>	<p>（進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満</p>	<p>【5月スタディーサポートから7月進研模試で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】</p> <p>130人以上 B</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】多くの生徒が学力を伸ばしているものの、伸び幅は小さい。入学式後すぐに休校に入ったため、家庭学習の方法を指導することができず、高校の学習スタイルを定着させきれていない。</p> <p>【改善策】家庭学習を一定量確保することを習慣化するため、予習・授業・復習の関連性を実感させ、小テスト等ともリンクした指導に学年団を挙げて取り組む。</p>
		<p>【成果指標】 （1年生生徒） 着実な学力形成を果たしている。 （進研模試1月）</p>	<p>1月進研模試での学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が</p> <p>A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合での学力到達度（GTZ）】</p> <p><生徒：1年生></p> <p>25人未満 C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】5月のスタディーサポートから大幅に減っている。家庭学習の方法を指導できておらず、高校の学習スタイルを定着させきれていないことが原因と考えられる。今後家庭学習に対する指導を徹底していく必要がある。</p> <p>【改善策】予習や課題など家庭における習熟度別学習指導を徹底し、上位層の意識向上を図るとともに、学習に対するモチベーションを喚起し、学年全体の学力向上に注力していく。</p>
		<p>【成果指標】 （2年生生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較）</p>	<p>2年次に、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 200人以上 B 160人以上 C 160人未満</p>	<p>【1年1月進研模試から2年7月進研模試で学力を伸ばした生徒】</p> <p>160人未満 C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】普通科普通コースの偏差値50～60の層で伸び悩み、とくに数学に課題がみられる。また例年に比べ学習時間が大きく減少しており、休校の影響により学習習慣を定着させる指導が不十分な実態がある。</p> <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> 数学停滞の理由として計算力を育成できていないことが課題としてあり、7月よりSHで計算力をつけるためのプリント学習を継続的に行っている。 生徒が学習を中心とした生活を構築できるよう、担任がClassiを活用して生徒の生活指導を徹底する。

	<p>【成果指標】 (2年生生徒) 着実に学力を伸ばしている。 (進研模試1月)</p>	<p>1月進研模試3教科総合で学力到達度(GTZ)のSランクの生徒が</p> <p>A 40人以上 B 35人以上 C 35人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合での学力到達度(GTZ)】 <生徒:2年生></p> <p>35人未満 C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】S1・S2層は増加したが、それに続くS3層を減少させた。 【改善策】 ・習熟度別の週末課題の継続や課題の課し方の工夫を行うとともに、上位層への個別指導を行う。 ・志を高く持たせるよう、Sランクの生徒への指導を継続するとともに、Aランクの生徒においても、個人面談を通してS難関や難関大学を目指す助言等を行う。</p>
		<p>1月進研模試での5教科総合偏差値で60以上の生徒が</p> <p>A 100人以上 B 80人以上 C 80人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合偏差値】 <生徒:2年生></p> <p>80人以上 B</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】1年1月模試から比べると2名減少している。 【今後の対応】 ・習熟度別指導の改善を行い、授業での説明等や課題の量と質を、適切な負荷となるよう差異化を図る。 ・各教科で学習到達度を図るための小テストや問題演習、および予習復習のチェックのあり方を見直す。 ・教員の教科指導力と進路指導力の向上を図るため、担任会議や教科会議を活用する。</p>
	<p>【成果指標】 (3年生生徒) 個々の志望大学の結果による。 *スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。</p>	<p>スーパー難関大学の合格者が</p> <p>A 5人以上 B 3人以上 C 3人未満</p>	<p>【7月進研模試5教科総合での学力到達度(GTZ)】 <生徒:3年生></p> <p>スーパー難関大学C 難関10大学 A 金沢大学 B 国公立大学 A</p>	<p>【判断基準】大学入試結果で判定する。Cの場合は改善策を検討する。 【分析】7月進研模試の結果(GTZ) ・スーパー難関大合格可能性のある生徒 …C ・難関10大学合格可能性のある生徒 …A ・金沢大学合格可能性のある生徒 …B ・国公立大学合格可能性のある生徒 …A 【改善策】 ・重点指導が必要な教科を個別に確認し、現在実施しているスーパー難関大学志望者への講座、添削指導を徹底して行う。 ・授業や教科面談を通して個に応じた学習方法や具体的に取組むべき課題を確認し、着実に学力を伸ばす。 ・モチベーションを向上させるために、文理別の学年集会、STやLHを活用した学習及び生活指導、個人面談を行い、自律的、能動的学習を促す。</p>
		<p>難関大学10大学の合格者数が</p> <p>A 25人以上 B 20人以上 C 20人未満</p>		
		<p>金沢大学の合格者数が</p> <p>A 50人以上 B 40人以上 C 40人未満</p>		
		<p>国公立大学の合格者数が</p> <p>A 160人以上 B 140人以上 C 140人未満</p>		
学校関係者評価委員の評価	<p>将来に対するビジョンは高校時代に変化するもので、早期に進路目標を定めることを求める指導だけでは不十分である。</p>			
評価結果を踏まえた今後の改善方策	<p>進路目標やキャリア意識がどのように変化しているか動向を把握しながら、進路指導やキャリア教育を進めていく。</p>			

3 教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。</p> <p>・教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理能力などの実践的な指導力の向上に努める。</p> <p>・校内でのOJTによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。</p>	<p>・スマートフォン・携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付</p>	<p>【成果指標】 （生徒） スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。</p>	<p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が</p> <p>A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 <生徒></p> <p>96.2% A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度同時期及び最終結果とも93.3%であり、2.9ポイントの増加となった。どの学年も増加しているが特に3年生の3.9ポイントの伸びが顕著であった。これで3年目になる年間を通してのスマホ・ネットトラブル防止啓発指導が浸透してきたと思われる。</p> <p>【今後の対応】 100%になることを目指して、新しいネットトラブルに対し、タイミングよく、さらに時世に乗り遅れないよう生徒に発信していきたい。</p>
	<p>・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進</p> <p>・学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示</p> <p>・Classiを活用した予習内容の可視化</p> <p>・予習チェックの呼びかけ</p> <p>・「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間で</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 国語・数学・英語において「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>国語・数学・英語における「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が</p> <p>A 70%以上 B 65%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【7月実施第1回生徒による授業評価】</p> <p>50.5% D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度と比較して8.3ポイント減だった。例年であれば4月～7月の4ヶ月をかけて定着をはかるところであるが、今年度はコロナ禍の影響もあり、指導が徹底できていない。また、進捗確保のために授業中での予習チェックが徹底できなかったことが要因と考えられる。</p> <p>【今後の対応】 教科会議等を通して、効果的な予習指導を共有し、授業改善に取り組むとともに、Classiの分析結果を発信し、生徒の学習意欲の改善を図る。</p>
	<p>・批判的思考力育成課題「知のよみち」の授業での更なる活用を図るために編集を工夫</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が</p> <p>A 65%以上 B 60%以上 C 55%以上 D 55%未満</p>	<p>【7月実施第1回生徒による授業評価】</p> <p>55.4% C</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度と比較して1.3ポイント減だった。補充授業の間は、進捗確保のために授業中に左記の力を付ける十分な時間をとることができなかったことが要因であると考えられる。</p> <p>【今後の対応】 教科会議を通して、思考力育成の方法、課題や考査問題の出題方法について検討を進め、改善していく。</p>
	<p>・学年・教科を主体としたOJTによる若手教員育成を推進する。</p>	<p>【成果指標】 （若手教員） OJTをとおして教員としての成長を実感できる。</p>	<p>OJTにより「教員としての成長を実感できた」「ややできた」と答えた若手教員の割合が、</p> <p>A 100% B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 <教員></p> <p>実感できた 42.9% ややできた 42.9% 計 85.7% D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 一部の教員が業務に達成感を感じられていない。背景には、若手教員に割り振られる業務には遂行にあたって創意工夫をはかる余地が少ないことが考えられる。</p> <p>【改善策】 業務を割り振る主任が、達成感を持てるよう業務の意義やねらいを丁寧に説明するとともに、工夫や改善を促していく。</p>
学校関係者評価委員の評価	若手教員を育成するためには、研修や講習会を行うよりもOJTを進める方が効果的ではないか。				
評価結果を踏まえた今後の改善方針	研修で学んだことをOJTで実践させることで、若手教員の育成を効果的に進める。				

4 魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・特色ある教育活動（第4期SSH事業、NSH事業）を全校的に推進し、学校全体の活性化を図る。</p> <p>また、その活動・成果を地域の小中学生に広報し、本校の魅力として伝える。</p>	<p>・学校設定教科「探究」による探究能力の育成</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>「4月に比べると探究能力が「ついた」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>4月に比べると探究能力が「ついた」・「ややついた」と評価した生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 <生徒></p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>今後実施予定</p>
	<p>・物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>全国大会相当への出場の決定数が増えている。</p>	<p>全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が</p> <p>A 4以上 B 3 C 2 D 1以下</p>		<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>今後随時開催予定</p>
	<p>・英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進</p> <p>・複数年を見通した指導の構築</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。</p>	<p>左記大会やコンテストに参加し</p> <p>A 優勝を含む入賞6件以上 B 入賞 5件 C 入賞 4件 D 入賞 3件以下</p>		<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>今後随時開催予定</p>
	<p>・文系フロンティアコースに所属する生徒の実用英語技能検定2級以上における取得率の増加</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>左記の検定合格者数が増加している。</p>	<p>左記検定における合格者数が</p> <p>A 40人以上 B 36人以上 C 34人以上 D 33人以下</p>		<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>今後随時開催予定</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・上位進出を目指した質の高い日々の活動 ・部主将会議の開催 ・上位大会出場を称える広報活動の工夫 	<p>【成果指標】 (運動・文化)</p> <p>全国大会に15種目以上、北信越大会・北信越新人大会・ブロック大会に50種目以上の部活動が出場している。</p>	<p>全国大会・北信越大会・北信越新人大会・ブロック大会に出場した種目が</p> <p>A 全国大会15種目以上 北信越・北信越新人50種目以上</p> <p>B 全国大会15種目以上 北信越・北信越新人45種目以上</p> <p>C 全国大会10種目以上 北信越・北信越新人45種目以上</p> <p>D 全国大会10種目未満 北信越・北信越新人45種目未満</p>	<p>〈運動部・文化部で全国・北信越大会に出場した種目数〉</p> <p>全国大会 5種目 北信越大会 0種目</p> <p>D</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】コロナ禍のため、ほとんどの大会が開催されなかった。左記の5種目は文化部でSSC、郷土研究、文芸、放送、吟詠剣詩舞で、コロナ以前の予選で出場が決まったものである。大会は映像や作品の提出や、オンラインでの口頭発表と質疑応答である。</p> <p>【今後の対策】今後もコロナの収束動向は先が見えず、現段階では高体連・高文連・高野連他の行事の見通しも立っていない。感染に十分に注意しながら、今できることに集中できるよう指導したい。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>生徒に対するICT機器購入の補助について考えてほしい。</p>				
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>ギガスクール構想を推進するために、校内無線LANの高速化が図られている。機器を持たない生徒には貸し出しを行う。</p>				

5 働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の資的向上に努める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・月2回の定時退校日と8月の閉校日を設ける。 ・最終退校時刻を意識して計画的に業務に取り組む。 ・長期休業中にまとまった休暇を取得する。 ・年休を計画的に取得する。 ・会議のペーパーレス化をさらに進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。 ・情報共有の仕方を工夫し、職員朝礼を原則として週に1回とする。 ・業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。 ・部活動の休養日を適切にとる。 	<p>【成果指標】 （教員） 業務の工夫・改善により効率化を図る。</p>	<p>業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【7月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞</p> <p>よくあてはまる 35.8% ややあてはまる 43.4% 計 79.2% C</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 6月の学校再開で、学びの遅れを取り戻すために授業時間数が増加したことで、それともなう準備時間が増加したことが多忙感を助長していると考ええる。</p> <p>【改善策】 9月以降は通常の時間に戻るのので、授業時間は例年どおりになると予想する。これに加えて会議の持ち方の改善を図るとともに、学校行事等の事業の見直しを進める。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>会議の時間短縮を図るには、情報共有のための会議と審議のための会議を明確に区別すべきである。</p>				
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>会議の目的に応じて、規模や時間を設定し、効率的に業務を行っていく。</p>				